

出張所の窓辺から

52



淀川管内に7つある、国土交通省淀川河川事務所の出張所から職員が管内のみどころを紹介します。今回の担当は毛馬出張所です。

毛馬出張所は淀川河口から約10km上流の位置にあり、淀川と大川の分岐点にまたがるように構えている毛馬排水機場の一角にあります。出張所の周辺には、淀川大堰・毛馬水門・毛馬閘門といった治水施設が建ち並んでいます。中でもひととき目を引くのはやはり淀川大堰でしょう。淀川の川幅いっぱい、約300mもの延長がある淀川大堰は、昭和47年(1972年)に着工し、昭和58年(1983年)に完成しました。両端に幅40mの調節ゲートを2門と、中央に幅55mの制水ゲートを4門、計6門のゲートを備えており、普段は調節ゲートで大堰下流への放流量をコントロールしています。主な役割は、塩水の遡上防止と大堰上流の水位保持、渇水時の都市用水を確保するために必要な調整池機能です。

このように、私たちの生活に重要な役割を果たしている淀川大堰ですが、さらなる進化を遂げようとしています。現在、淀川大堰があるため、新淀川から淀川への船舶の航行はできません。ここに、幅約20m、延長約70mの閘室を作り、新淀川か



毛馬水門・毛馬閘門



ら淀川大堰を経由した上流へのルートを整備を令和3年度から推進しています。

完成すれば日本最大級の閘門の誕生となるこの淀川大堰閘門事業は、阪神淡路大震災の時に舟による資材運搬が早期復旧に寄与したことや、観光にも舟運が重要な役割を担っているという背景から、舟運復活の気運が高まったことにより始まりました。

淀川大堰閘門は、2025年開催予定の大阪・関西万博までの完成を目指して、工事を進めています。

淀川河川事務所のホームページでは工事進捗をタイムラプス動画にして掲載していますので、是非ご覧ください。

淀川河川事務所ホームページ「淀川大堰閘門」



きものイチョシ!!
第35回

伏見出張所管内 河川レンジャー 中野 清



ダイサギ

サギ [Sagi]

コサギ

淀川の河川敷に行くといろいろな鳥が見られます。珍しい鳥を探するのも楽しいですが、すぐ見つけられる鳥の多様な行動を見るのも面白いです。

砂州が広がる川で真っ白な首長の大型(全長90cmくらい)の鳥がいたら白鷺(しらさぎ)の仲間のダイサギです。川の浅瀬を覗き込みながらゆっくり歩いています。獲物を見つけたら狙いを定めて、瞬間長い首を水中に突き刺し、仕留めるハンターです。ちょっと恐竜にも見えなくもないです。大型の鳥なので飛ぶ姿にも力強さがあります。川すれすれを飛ぶ姿は大迫力。着水するときは、大きく羽を広げてブレーキをかけて優雅に着地します。

淀川に流れ込む支流やその合流点で見かけるちょっと小型(全長60cmくらい)の白鷺は、コサギです。黄色い足の指が目印です。(ちなみにダイサギは黒色です)

狩りの方法はダイサギと違い、ちょっとしたテクニクを使います。浅瀬を歩きながら、足を小刻みに振動させて、驚いて出てきた魚を捕ります。また、段差で小さな滝のようになったところを魚が登っていると、さっと飛びながら近づき、上手にくちばしでキャッチします。あまりの早業に感動します。近くにダイサギがいると悔しいのか、近づいて邪魔をすることがあります。

サギの仲間は繁殖シーズン(4月から7月ごろ)になると見た目が変わります。ダイサギは、

クチバシの色が黄色から黒色、目先がコバルトブルーに変わり、背中にはきれいな飾り羽が出てきます。コサギは頭に長い冠羽が出てきて、目先と指の色はほんのりピンク色に変わります。変身した姿はとっても美しいです。

ダイサギ・コサギは一年中みられる鳥です。見かけたら一度、立ち止まってじっくりその行動を楽しんでください。



ダイサギの繁殖期は婚姻色と呼ばれる、目先が鮮やかなコバルトブルーに変わります。

表紙撮影地、淀川河川公園八雲地区(守口市) 河川敷でバッタを捕まえて種別に飛距離を競うのがバッタのオリンピックです。今年も淀川流域の河川敷で開催します。

くわしくはこちら



川と人、人と人を結ぶ

河川レンジャー RIVER RANGER NEWS

淀川管内

YODOGAWA 2023 BATTA OLIMPIC



バッタのオリンピックで学ぼう!



国土交通省のサイト「川の防災情報」では、全国の河川の雨量・水位情報をチェックできます。川遊び中にお天気の変化が気になったときには、ぜひご利用ください。

<https://www.river.go.jp>

河川レンジャーは淀川流域を舞台に行政と流域住民をつなぐ橋渡し役を担っています。詳しくはホームページをご覧ください。

発行責任者: 淀川管内河川レンジャー事務局
〒573-0056 大阪府枚方市桜町3-32 TEL:072-861-6801(平日9時~17時)

<https://www.river-ranger.jp>

公式LINE 始めました

次号は1月発行予定です!

※本誌掲載記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。



バッタのオリンピック オリで学ぼう!



「バッタのオリンピック」は大阪市立自然史博物館が開発した観察手法で、参加者が捕まえたバッタを選手に見立て、種類別・雌雄別に飛距離や滞空時間で競う活動です。バッタを捕まえて種類を調べるだけでなく飽きてしまうかもしれませんが、この活動では、バッタの選手を選んで飛ばす競技まで目が離せません。河川レンジャーでは、2011年、木津川での活動を皮切りに、年々開催場所を変えながら活動を継続しています。



カワラバッタがいなくなった?!

活動を始めた当時は、木津川流域やくずはエリア(枚方市)で見られていたカワラバッタを昨今見かけなくなった?! 淀川流域各所で継続していることで河川の自然環境やバッタの生息分布の変化に気づくことがあります。

バッタがつなく?! レンジャーと住民

レンジャーがこの活動を始めたのは、「身近な川の魅力を住民の方に知らせたい、川を身近に感じることで一緒に

川の課題を考えるきっかけにできれば」との思いがあるからです。

バッタのオリンピックをきっかけに、今まで川に関心なかった方が身近な川の豊かな自然環境に気づき、1~3月の一斉美化アクションなどの河川美化の活動に協力いただくなどに波及しています。川のことを一緒に考え、行動することに少しずつ近づいてきています。



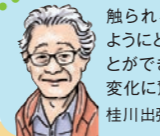
親子で参加される方が多く、「河川敷で初めて遊んだ、こんなにバッタがたくさんいるとは知らなかった」という声を多くいただいています。淀川をより身近に感じて自然環境に触れていただく機会になっています。

枚方出張所管内河川レンジャー 道場 明子



競技結果集計の待ち時間に公園の事業説明を行うことや、参加者からのアンケートで河川公園に対する意見や要望を集めて、河川公園利用の活性化に取り組んでいます。

淀川管内河川レンジャーアドバイザー 原 健二



「怖いと言って触ることのできなかったバッタに、だんだんと慣れて、自分で捕まえ、触られるようになった」、バッタが死なないようにと力を加減してそっと指で捕まえることができるようになった」など子どもたちの変化に驚く保護者の方が多いです。

桂川出張所管内河川レンジャー 南良 靖雄

大都会の大阪市内のど真ん中、対岸に梅田の高層ビル街が見える淀川の河川敷にもバッタが生息している自然環境があることをバッタのオリンピックの体験で知ってもらいたいです。

福島出張所管内河川レンジャー 桑村 和男



バッタのオリンピックは、たくさんのバッタが生息できる環境があるところしか開催できない活動です。淀川が身近な自然と触れ合える場所であり続けるよう、レンジャーとしての取り組みを行っていききたいと思います。

淀川右岸さんぽ

「くらわんか舟から唐崎過書浜」～三箇牧を訪ね歩く

淀川右岸を訪ね歩いてみると、史跡が点在し、淀川の改修の歴史も垣間見ることが出来ます。かつてこの付近は、芥川が淀川に合流する古くから淀川の川港として開かれた場所で、唐崎や番田といった地名も古代唐船の寄港にちなんだものとされています。

平安時代には、この付近から摂津島飼付近までに近都牧(きんとまき) (諸国から京に取めるべく集めた牛馬を一時的に飼育する牧場) が設けられたと伝えられ、のちにこれを、上・中・下に分けたことから「三箇牧」(さんがまき)の地名が生まれたようです。

江戸時代には、内陸の高槻や富田が発展し、これらの外港として唐崎浜や三島江浜が栄え、荷受問屋の蔵が建ち並んでいたと伝えられていました。また、三島江浜は古くから歌枕にされた葦や月の名所で、近世には三島江の渡しが設けられ、対岸の枚方市の出口(松ヶ鼻)とを結んでいて、ここが能勢の妙見山との参詣道になっていたところから、往事を伝える石灯籠や道標が今でも残っています。

少し下流の柱木浜



唐崎の段倉



軒先の木船



三島江浜跡(妙見宮常夜灯石灯籠)



柱木の堤防上にある「くらわん舟」石碑



川の地点表示



唐崎付近で行われていた乳牛の放牧 ※(黒く見えているのは堤防の影)



のあたりに足を延ばすと淀川堤防には、くらわんか舟の発祥の地碑が建てられています。「食らわんか、くらわんか」と呼びながら三十石船に漕ぎ寄せて煮売りをしたであろう往時をしのぶよすがとなっています。

一方、洪水の多かったこの付近では、水や湿気から家を守るために段倉と呼ばれる家屋が多く建てられ、集落の軒先には、木船などが見られましたが、明治以降、大規模な河川改修工事が行われた後に、こうした建物が少なくなったものの、今でも名残りをみる事が出来ます。

また、昭和25年(1950)ごろには、この付近の淀川河川敷で、摂津市島飼付近までの広い範囲で放牧をしていて、唐崎付近は昭和55年(1980)までこうした風景が見られたようです。

現在では、三島鴨神社のほか三島江河川敷公園に、野草地区も整備され野鳥愛好家や朝の散歩コースとして地域の皆さんなどに親しまれている地域でもあり、ゆっくりと散策してみるお勧めのコースです。



高槻出張所管内河川レンジャー 竹本 克巳

※写真提供:長野 実氏



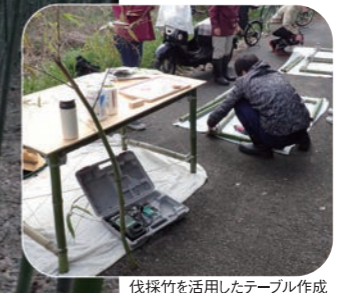
川の課題である河道内樹木(竹林)の繁茂

淀川河川公園大山崎地区には、マダケで構成された河道内樹木があります。河道内樹木は、洪水時の流下を阻害し水位上昇が懸念されるため、定期的な伐採や伐根が行われていますが、再生は早く、数年で伐採前の状態に戻っているのが現状です。

この竹林内には、京都府レッドデータブックにおいて注目種に選定されている陸生ホタルの「ヒメボタル」が生息していることから、生息環境の保全のため竹林を残し、維持管理していく必要がありました。



散策路の造成整備作業



伐採竹を活用したテーブル作成



積み上げた竹チップの中から出てきたカブトムシ

課題解決のための方策

河川レンジャーはヒメボタルの生息環境に配慮した竹林の維持管理を行うため、地域イベントや地域の自然保護活動へ参加して広報活動を行うとともに、学習会を開催し、治水・防災や川の魅力を伝えるとともに、この活動の協働を呼びかけました。今から10年以上前のことです。

近年では、中学校の自然観察クラブや自然保護NPO、ボランティアや地元企業など多くの参加が得られるようになり、継続的な竹林の伐採・整備を行っています。

伐採竹は、地元の竹加工企業による竹製品への利用や、地域の商店街などで有効活用されるとともに、地元企業の協力によりチップ化し、減量化とともに竹林内に整備した散策路に敷き詰めて歩きやすくしています。竹チップは、一部竹林内に積み上げ、発酵し堆肥化して、カブトムシのすみかともなり、幼虫および成虫の生息が確認されるなど、竹林を資源とした新たな活用も見出されています。

維持管理というしんどいイメージですが、環境保全や水害対策、地域貢献につながっていると思うと、やりがいがあります。時には竹の生態学習会・ヒメボタル観察会などの楽しい活動もあります。皆さんも参加しませんか?

グリーンインフラ × 河川レンジャー



グリーンインフラとは、自然環境が有する多様な機能(生物の生息・生育の場の提供、良好な景観形成、気温上昇の抑制等)を活用し、持続可能で魅力ある国土づくりや地域づくりを進める取り組みを指します。このコーナーは、河川レンジャーの活動をグリーンインフラの視点で紹介します。



淀川管内河川レンジャーアドバイザー 東 親志